

第二研究会開催のお知らせ

ランピースキン病について

森岡 一樹 先生

農研機構 動物衛生研究部門越境性家畜感染症研究領域 海外病グループ

日時：2025年2月19日（水） 15:00 - 16:30

場所：日本生物科学研究所 管理棟 会議室 2・3（オンライン併用）

【要旨】

ランピースキン病はポックスウイルス科カプリポックスウイルス属のランピースキン病ウイルスの感染によっておこる牛科動物の感染症であり、WOAHのリスト疾病および国内では届出伝染病に指定されている。牛科の家畜の他、牛科野生動物の野外感染例が報告されている。LSDVは同属の山羊痘ウイルスと羊痘ウイルスと血清学的に交差を示す。

本病の主な症状は、41℃を超える発熱、体表リンパ節の腫脹および皮膚の結節病変形成である。結節は直径0.5~5cmと様々で全身に認められるが、特に頭、首、乳房、陰囊、外陰部、会陰等に多発する傾向がある。体表のほか、口腔および消化管、生殖器、気管および肺にも病変形成が認められる。臨床症状の重篤度は多様で、流行しているウイルスの性状あるいは牛の品種でも大きく異なる。ただし、同一品種であっても年齢、健康状態等が大きく影響するとされる。

本病は牛から牛への接触伝播、飲水やエサを介した間接伝播および吸血昆虫による機械的伝播によって拡大する。近年の感染拡大において最も問題とされているのは媒介吸血昆虫であり、サシバ工、ヌカカ等による伝播が野外および実験室内で証明されている。これまでに吸血昆虫体内でのウイルス増殖は証明されておらず、サシバ工で最大8日間、ヌカカで2.4日間の感染性ウイルスの生存が報告されている。

本病のワクチンは、弱毒生ワクチンが広く使用

されており、感染防御効果は高いが、発熱や軽度の皮膚病変を発症する副反応が一定の割合で報告される。また、ワクチン株と野外株の間でウイルス遺伝子の組み換えに生じた、リコンビナント株が出現しており、近年のアジアの流行はリコンビナント株によるものである。

本病は1900年代前半にザンビアで初めて確認された感染症でアフリカに限局していたが、2012年以降、中東、南東ヨーロッパ、ロシア等に感染が拡大した。2019年に中国で発生が確認されて以降は東アジアや東南アジアで流行が拡大し、2023年10月には韓国で発生が確認され、全国ワクチン接種の末、一時は清浄化したと思われたが、翌年2024年8月には再び発生が確認された。我が国への侵入が危惧されるなか、2024年11月に九州で国内初となる本病の発生が確認された。

本病の対策としては、疾病の早期発見、伝播リスクの高い発症牛の淘汰あるいは隔離、ワクチン接種、媒介吸血昆虫対策が有効と考えられる他、潜伏期間が長い動物の移動には十分に注意が必要とされる。

今回は本病の特徴、近隣諸国での情勢、国内での対策等について解説する。



NIBS

主催

一般財団法人日本生物科学研究所

<https://www.nibs.or.jp/>